【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	千葉県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	野田市立関宿小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	１３
児童数	３３	３１	３１	３８	４０	３６	0	２０９	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力を身に付けた子どもの育成
－国語科・算数科の少人数授業を中心にして－

２．研究内容と方法

（１）　実施学年・教科

・全学年の国語科及び算数科
基本的な教科である国語科・算数科での具体的な手だてを図り、児童の主体的な学習を喚起することが、研究主題に迫る方策と考えたため。

（２）　年次ごとの計画

平成15年度

○　テーマ
確かな学力を身に付けた子どもの育成
－国語科・算数科の少人数授業を中心にして－

○　研究の見通し（仮説）
①国語科及び算数科の少人数授業を中心にして、個に応じた指導方法の工夫や指導と評価の一体化を図れば、児童一人一人が、確かな学力を身に付けられるであろう。
②国語科及び算数科の学習への興味・関心を高める手立てを工夫すれば、児童一人一人が、確かな学力を身に付けられるであろう。
③国語科及び算数科の学習を支える技能の向上を図れば、児童一人一人が自ら学び、考え、進んで活動するようになり、確かな学力を身に付けられるであろう。
④児童一人一人を大切にする人権教育の実践を図れば、豊かで思いやりのある心とセルフエスティームが育まれ、確かな学力を身に付けられるであろう。

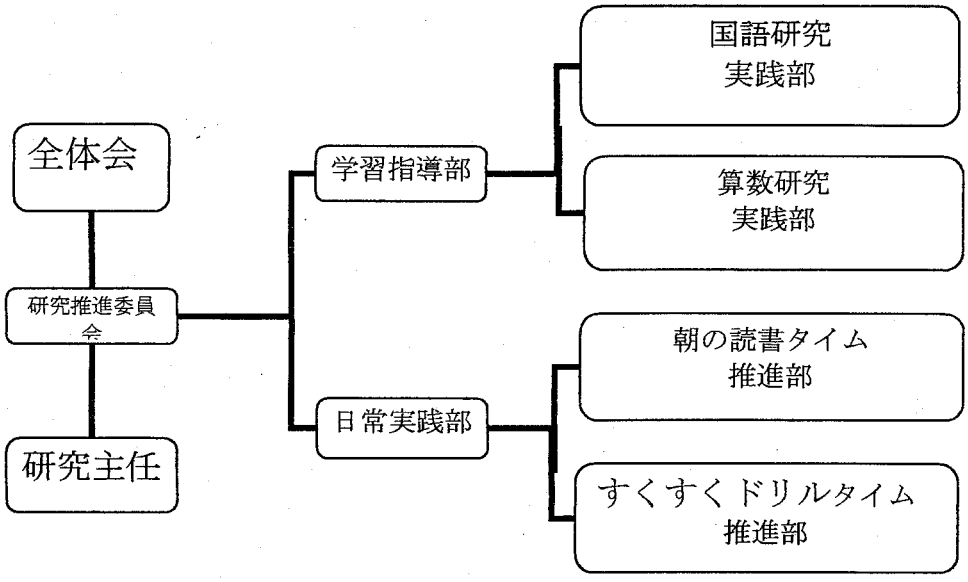
○　研究の内容・方法
・共同研究を支えるための充実した理論研修を行う。
・「学力」についての考え方や定着の具体的な方策や実践についての共通理解を図る。
・先進校を視察して、学習過程や授業実践を参考にし本校の研究の推進を図る。
・校内研修会に、講師を招聘して、本校の研究の在り方についてご指導いただく。
・研究推進に必要な事前調査及び事後調査を行う。
・アンケート調査や聞き取り調査を通して、児童・保護者・地域の実態把握を行う。
・児童の学力に関する様々なデータを整理し、分析・考察を行う。
・基本的な教科である国語科と算数科の少人数授業の実践研究を行い、個に応じた指導方法・指導体制の工夫改善を行う。
・少人数制の授業実践を行い、講師を招聘し研究授業を行う。
・個に応じた指導方法・指導内容の工夫改善を行う。（発展的な学習や補充的な学習のあり方やその指導のための教材の開発）
・到達度評価計画に基づいた指導と評価の一体化を目指した授業実践を行う。

	・確かな学力の定着を支える学習活動の実践を工夫する。 ・「朝の読書タイム」の充実を図り、読書活動を推進する。 ・児童の実態にあった自作ドリル（習熟と発展）を作成し、「ドリルタイム」の効果的な実践を推進する。

平成16年度	○ テーマ 確かな学力を身に付けた子どもの育成 －国語科・算数科の少人数授業を中心にして－ ○ 研究の見通し 国語科及び算数科において、児童の実態を把握し、指導方法・指導体制及び指導のための教材の開発、併せて評価方法の工夫等の実践研究を通して、児童一人一人に、確かな学力を身に付けさせるための指導のあり方について究明する。 ○ 研究の内容・方法 平成１５年度に準ずる。

（3） 研究推進体制

① 研究の組織



② 研究推進委員会 ※ 毎週木曜日を定例日とする。

低学年	中学年	高学年	担　外	会　場
１名	１名	１名	校長・教頭・教務主任・少人数加配教員（研究主任）・少人数加配教員（国語科主任）・児童生徒支援教員	校長室

Ⅲ 平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

① 国語科

○「書くこと」において、何を書くのか、誰に書くのか、ねらいと対象を明確化させることにより、集中して取り組むようになった。

○個に応じて書く観点を提示することにより、抵抗感なく積極的に取り組むようになった。

○自己評価活動により、１単位時間での振り返りが図られた。

○好きなコース選択をさせることにより、意欲の向上が図られた。

② 算数科

○個々の実態をより細かく把握できるようになり、適切な指導が可能になったことで知識・理解及び計算技能の向上が図られた。

○少人数のため、個を励ましたり、褒めたりの支援が増え、進んで発表したり問題解決したりするようになってきたなどの情意面での向上があげられる。

③　共通

○単元を見通した学習計画を立てることにより、効果的な学習形態・評価方法を取り入れることができた。

④その他

○「お話の広場（読み聞かせ会）」等、学習支援ボランティアの定着が図れた。

○「読書タイム」「ドリルタイム」の定着と技能の向上が図られた。

3．今後の課題

○児童アンケートの結果より、高学年の意欲の向上を図らなければならない。

○少人数授業担当職員の割り振りにさらに調整と工夫を加える必要がある。これは年間を通してだけではなく、学期、場合によっては週単位で考えていかなければならない。

○国語科と算数科の取り組みのバランスが難しい。年度当初、国語科は低学年のみに少人数担当を配していたが、どうしても算数科に比重が傾きがちとなる。

○カリキュラム会議を十分に機能させるための担任と少人数担当の話し合いの時間の確保が難しい。

○自己評価カード等の活用により、評価の方法や手段は幾通りか考えられるが、共通の評価を行う場合、客観性を持たせるための手立てを検討しなければならない。

○学習支援ボランティアの日常的定着を図る必要がある。

○児童アンケートより、「ドリルタイム」「読書タイム」の効果は認識されているものの、楽しみながらの取り組みが高学年の値が急激に低くなっており、対策が急務である。

○「ドリルタイム」「読書タイム」のマンネリ化への対策を常に講じなければならない。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○学年末に行われる「国語科・算数科」の学力テストに向け、単元ごとの学習状況を担任が各自のデータをまとめる。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○　平成１５年　８月２２日　埼玉県　平成１５年度　第１回　「学力向上フロンティアティーチャー研修会」において実践状況の報告

○　平成１５年１０月２１日　平成１５年度　「学力向上推進東葛飾地区協議会」において実践状況の報告

○　平成１５年度　「研究のあゆみ」（研究紀要）をホームページ上に紹介予定

【新規校・継続校】　１５年度からの新規校

【学校規模】　６学級以下

【指導体制】　少人数指導　Ｔ．Ｔによる指導　一部教科担任制

【研究教科】　国語科　算数科

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　有